

7. 「灯ろう流し」に被爆死者の冥福と世界平和を祈って揮ごう



ひろしま・ブルガリア協会

理事

樋口 英子 団体職員

「平和は私たちの手の中にあるので、守らなければならない」。これは、被爆60周年の広島平和記念式典に参加のために初めて来広されたダミャノフ市長が8・6の「ヒロシマの日」の夜に、太田川に浮かべる「灯ろう流し」の灯ろうに揮ごうされた言葉です。通訳のマリアさんは、「平和を壊さないで下さい」と書かれ、ご兩人から「8月6日の午後に広島を離れるので夜に流して置いてください」と託されましたので、当日の夜に多くの方の灯ろうと一緒に流しました。

灯ろう流しは、原爆投下直後から熱さを癒すために次々と川に入って死亡していった多くの被爆犠牲者の冥福と世界平和に向けての決意を揮ごうした灯ろうを太田川に流す厳粛なイベントの一つです。

この灯ろう流しについては、私が今村常任理事に提案したところ、「良いアイデアです。大賛成」と賛同してもらい、8月5日の深夜に同市長の宿泊先のホテルを訪ねて実現したもので、ダミャノフ市長の誠実さと平和を思う強い心に強く感銘したものです。

これに引き継いで、翌日の平和記念式典後に「原爆展の開催」をつ約束された同市長に対し、誠意のある方だと思つづく思たものです。

ホテルに行く際に深夜にもかかわらず同行して下さった当協会の今村専務理事、高丸晃専務理事、松尾健司理事、今村悦子さんらにもお礼申し上げます。



「灯ろう」に署名するダミャノフ市長
(2005年8月5日)



ヒロシマの川で行われる「灯ろう流し」

8. 協会とダミャノフ市長の「平和への思い」が一致し、原爆展が開催へ



ひろしま・ブルガリア協会

理事

松尾 健司 団体職員

カザンラック市での「原爆展」の開催を通して、人と人との「縁」の素晴らしさを今更ながらに感じているところです。というのは、私が勤めているNPO法人の職員を通して、ひろしま・ブルガリア協会との「縁」ができ、その後、同法人が管理運営している事務所・会議コーナーで再三に渡り、協会の理事会やブルガリア理解講座、ブルガリアで活躍して帰国した元JICA 青年海外協力隊員・浜部直樹さんの世界遺産・スレバルナ自然保護区・「ペリカン繁殖地」復旧と保護の講演会などを開くようになりました。

その中の1つに、忘れもしない被爆60周年の前日に当たる2005年8月5日に、「カザンラック市のステファン・ダミャノフ市長を囲む夕べ」(歓迎懇談会)が、会議コーナーで開かれたのです。席上での協会との懇談会や、引き続いての歓迎パーティ、深夜の灯ろう流しの灯ろうへの平和希求の揮ごうなどを行いました。その際に、協会側の意見や声に通訳のマリアさんを通して真剣に耳を傾けられる同市長の姿勢に接し、本当にヒロシマに関心を持っておられるな、と驚いたものです。

翌8月6日に、協会役員がカザンラック市での原爆展の開催を提唱したのに対して、同市長は「グットアイデア」と即、開催に合意された、と聞きました。何でもそうですが協力して1つの大きなイベントを成功させるためには、「一方の思い」だけでは実現しないものです。平和市長会議や平和式典に参加されて原爆の悲惨さを認識されていたからこそ、原爆展開催の提言に即、賛意を示されたものと思います。

友好の始まりは、両国・市の現状と歴史をお互いに知り合うことです。それだけに、協会メンバーもブルガリアやカザンラック市の歴史と現状を翌理解しなければならない、と思っています。今後、両国・市との平和交流をさらに進めて行きたいと決意を新たにしているところです。

何はともあれ、自費負担で訪問団に参加された方々のご苦勞に感謝しています。ありがとうございました。



灯ろう流しに揮ごうするダミャノフ市長と
(2005年8月5日深夜)



ブルガリア理解講座で質問する松尾理事

ブルガリア理解講座で質問する松尾理事

Ⅲ. 広島市のブルガリア支援の姿勢

1. 市民の代表の一人として広島市議会で発言し、側面的に応援



ひろしま・ブルガリア協会

理事

渡辺 好造 広島市議会議員

昨年、ひろしまブルガリア協会が設立されて、1年以上が経過しましたが、役員の方々の懸命な努力により、大きな成果が着実に残されていると確信いたします。

海外との平和・文化交流は、永続性が最も求められることだと思いますので、今後も、中長期の将来計画を見据えた取り組みが大切になってくると思います。

これまで、ブルガリアからバラの女王・イヴァノヴァさん

と日本語弁論大会優勝者・エミアさんを、ひろしまFF(フラワー・フェスティバル)に招くことができ、さらに8月にはカザンラック市において原爆写真展も開催できました。

これらの実現に関しては、市議会議員の立場から、カザンラック市での原爆写真展の開催や同市との今後の交流推進に関して、2005年10月の一般質問で主張し(別紙、資料1 48ページ参照)、秋葉忠利市長から「できる限りの協力をしていきたい」との答弁をいただき、側面的に応援することができました。皆様には大変感謝しております。

2006年9月20日の第2次・訪問団の秋葉市長への

報告の際にも同席させていただき、同月28日の市議会本会議での一般質問で、ブルガリア関係の質問を入れ、市当局側から前向きな答弁(同、資料2 49ページ参照)を引き出すことができました。次への展開が楽しみです。

今後とも私の立場で応援できることに全力投球して行きたいと思っていますので、よろしく願いいたします。



(財)広島平和文化センターの齊藤理事長と
(2005年8月2日深夜)



原爆死没者の慰霊碑献花への道

Ⅳ. 協会の事務局メンバーからのコメント

1. カザンラック市の ばらの女王らを原爆資料館に案内し平和を再考



ひろしま・ブルガリア協会

会計幹事・事務局次長

久繁 礼子 法律事務所勤務

空の旅14、5時間もかかる遠き東欧の国・ブルガリアが一段と身近に感じはじめたのは、今年(2006)の5月1日の夜でした。この日は当協会が1日～15日まで招待したカザンラック市のバラの女王・イヴァノヴァさんと日本語弁論大会優勝者のエミアさん(ヴェリコ・タルノヴォ大学生)が初めて広島に足を踏み入れた日で、藤田副代表理事と今村専務理事とともに広島市中区の高層ホテルで夕食を一緒にしながら懇談したからです。

翌2日は、お二人を広島平和記念資料館(原爆資料館)の見学や原慰霊碑の献花、秋葉広島市長と藤田広島県知事、(財)広島平和文化センターの齊藤忠臣理事長らの表敬訪問、ひろしまFF(フラワー・フェスティバル)前夜祭の参加などにご一緒しました。3日のFFにも同行しましたがこの中で、一番印象に残ったのが原爆資料館の見学と原爆慰霊碑の献花の時でした。

原爆資料館には、これまで外国からの友だちを何度か案内しましたが、今回は同資料館の前田耕一郎館長の案内で詳しく説明を聞いたために、これまで以上に広島歴史や広島原爆投下による被害状況、世界の核兵器の現状などを知ることができ、改めて核兵器の脅威と被害の悲惨さを認識しました。

同資料館を出てから、原爆犠牲者を慰霊する花輪を持ってイヴァノヴァさんらと慰霊碑に向かう石畳を歩いて行くとき厳粛な思いがこみ上げて来ました。日ごろは、平和のことなど深く考えていませんでしたが、戦争や原爆の犠牲者のことが頭に浮かんで、慰霊碑の前に立った時には自然と被爆死者のご冥福を祈らずには居られませんでした。

そして、カザンラック市での第1回・原爆写真展の成功を願ったものでした。



プラメナさんらと慰霊碑に献花
(2006年5月2日)

2. 青年海外協力隊でブルガリアに縁し原爆展の準備へ



ひろしま・ブルガリア協会
事務局員

浜部 直樹 水産生物生態研究クラブ代表
元JICA青年海外協力隊員

ブルガリアと強く関わりを持ち始めたのは、宮崎大学大学院修士課程の農学研究科水産増殖学講座を修了した後の2003年7月から、JICAの青年海外協力隊員として同国に赴任してからです。同国では、1か月の語学研修を経て、北にあるルーマニアとの国境となっているドナウ川にほど近い、ハイロペリカン営巣地として現地では知られている世界自然遺産・スレバルナ自然保護区に赴任しました。

保護区はドナウ川の氾濫原としてその湿地環境が維持されてきた場所でしたが、湿地帯から農地への転換を図るためにドナウ川の氾濫を防ぐ堤防が川と湿地帯の間に作成された時期がありました。農地への転換が中止された今もその堤防は残されたままになっています。堤防の影響などから水質が悪化し、ペリカンの繁殖にも影響が出るようになりました。

そのため保護区は一時期危機遺産にリストアップされましたが堤防を貫通する形でドナウ川と湿地帯を結ぶ水路が設けられた結果水質などが改善され、現在は危機遺産から外されています。私の2年間を通しての主な活動はスレバルナに訪れる鳥類を同僚とともに観察すること、ペリカン営巣地の修繕を行うことで、私のいた2年間では100羽以上のペリカンが飛来し、繁殖に関わる貢献ができました。

JICA青年海外協力隊広尾訓練研修センターで3か月間の派遣前訓練を受ける前後等に広島に一時帰省した時期はありましたが、任務を終えて2005年7月に広島に帰ってきたのは

8年振りでした。そして、まさにこの時期に、「ひろしま・ブルガリア協会」が誕生していたことを聞き、直ちに連絡を取り会員になったのです。ひろしま・ブルガリア協会では11月4日の第2回「ブルガリア理解講座」を担当させてもらい、世界自然遺産・スレバルナ自然保護区やそこでの活動等について報告させて頂きました。その後は、協会の事務局員として2006年の8月にカザンラック市で開かれる「原爆展」の準備に関わらせて頂きました。今年5月にはカザンラック市のばらの女王・イバノヴァさんと日本弁論大会優勝者のエミリアさん（ヴェリコ・タルノヴォ大学の英語日本語学科3年）が、ひろしま・ブルガリア協会の招待で初来日しました。エミリアさんとはブルガリアで顔見知りの仲でもあり、女王を含めて久しぶりにブルガリア語で会話をすることができました。人生とは不思議で楽しいものと、思っているこのごろです。



スレバルナでペリカンの調査をする



世界遺産・スレバルナ自然保護区のペリカン
(ブルガリア総合生態学中央研究所発行パンフから)



「ブルガリア理解講座」(2005年11月4日)



ばらの女王らとブルガリア語で会話
(2006年5月13日)

V. 法人会員からのコメント

1. ばらの女王らの招へいへの協力を通してヒロシマの心伝える



ひろしま・ブルガリア協会
法人会員・中国タクシー株式会社
達川 秀男 代表取締役

学生時代から、ヒロシマには関心があり核兵器の廃絶と平和については関わり、一緒に活動してきた今村さんから協会の設立を聞き、少しでも協力できないかと法人会員になりました。

この中で2006年5月、当協会が、ブルガリアから、ばらの女



王と日本語弁論大会優勝者の2人を招待し、平和を謳歌する「ひろしまFF(フラワーフェスティバル)」のメインゲストとして参加してもらうことを聞きました。その際、FF当日にパレード用の衣装を着た、ばらの女王らお二人の移動車両としてタクシーの依頼(有料)がありましたが、ボランティアで2台のタクシーを1日、提供させていただき、「法人会員として少しでもお役に立つことができました」と嬉しく思っております。

さらに当協会が、ばらの女王らを平和記念資料館にもご案内したことを知り、若い時から「一人でも多くの外国の方に被爆の実相を知ってほしい」と心に抱いていたことを実行している当協会の法人会員の一人として、誇り持っているところです。

ことも高く評価したいと思います。これからもブルガリアと広島との地道な国際交流・協力に対し、できるだけの協力をして行きたいと持っておりますので、さらなるご活躍を祈っております。

*ばらの女王らの招待事業や第1次・ブルガリア訪問団派遣の際に特別なご支援とご協力をいただいた中国タクシー株式会社には、当協会として感謝状を贈りました。



07年度総会記念チャリティーパーティーで
(2007年4月14日 広島留学生会館)

今後の取り組み

I. 機会ある毎に原爆展の開催を推進

ひろしま・ブルガリア協会は、広島平和記念資料館(原爆資料館)から、「原爆写真ポスター」(30枚)と「サダコと折鶴ポスター」(26枚)の2セットと「被爆者の証言」などのDVD2枚、広島平和記念資料館・図録1冊の提供を受けて、ブルガリアのカザンラック市と共催して、同市での第1回・「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真展」を2006年8月1日から1か月間、開催した。

カザンラック市は、毎年8月に原爆展を開催し、その他の月には周辺の市町村などに巡回展の開催を呼びかけることにしている。なお、広島平和記念資料館の図録1冊は、第2ブルガリア帝国の帝都だったヴェリコ・タルノヴォ市にあるヴェリコ・タルノヴォ大学にも贈呈した。同図録は、同資料館の前田館長の好意によるもので感謝している。

当協会では、活動の大きな「柱」の1つとして、今後も機会あるごとにブルガリア国内の他都市にも、原爆展の開催を呼びかけていくことにしている。

当協会メンバー (2007年5月30日現在)

ひろしま・ブルガリア協会は、2005年7月8日(金)に広島県民文化センターで駐日ブルガリア共和国大使館からブラゴヴェスト・センドフ特命全権大使と賛同者約50人の参加の下で「設立総会」と「設立記念パーティ」(参加者約60人)を開きスタートしました。以来、会員や法人会員が徐々に増え現在、約80人の陣容になりました。この間、ブルガリアに関する各種のイベントやブルガリア訪問団の派遣などを繰り返してきましたが、これら全ての活動が実施できたことは、協会メンバーの方の温かく力強いご支援とご協力があったから、と深く感謝申し上げます。そこで、2007年4月20日現在の協会メンバーの方をご紹介させていただき、感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

名誉顧問:ブラゴヴェスト・センドフ(駐日ブルガリア共和国大使館特命全権大使)。顧問:岸田文雄、斉藤鉄夫(以上、衆院議員)、福本潤一(参院議員)。相談役:浅野洋二(広島県議)。会長:今村功(協会専属、HIES代表)。代表理事:寺田満和(アレルギー呼吸器・内科医師)。副代表理事:佐々木 和子(日本語教師)。専務理事:高丸晃(会社会長)。常任理事:坂本光裕(自治体職員)、藤田洋三(会社顧問)、三島佳代子(日本語教師)。監査:長松勇(中国放送取締役)。理事:碓氷芳雄(広島市議)、大庭千恵子(広島市立大学助教授)、木谷直俊(広島修道大学教授)、木村一江(認知症高齢者グループホーム施設長)、児玉浩(広島県議)、佐藤佳代子(主婦)、富沢佐一(中国新聞事業出版センター長)、中原好治(広島県議)、樋口英子(団体職員)、本多みどり(主婦)、松尾健司(団体職員)、矢田部順二(広島修道大学助教授)、山尾ひとみ(会社代表取締役)、渡辺好造(広島市議)。会計幹事・事務局次長:久繁礼子(法律事務所勤務)。幹事・事務局員:坂井紗織(広告デザイナー)。幹事:北後顕児(会社経営者)、高面寿子(主婦)、小原寿美(日本語教師)、目光紀(中国新聞勤務)、隅克博(会社役員)。会員・事務局員:木村美希(日本語教師)、政田睦男(公務員)、会員:浅井昭秋(元放送局ラジオ局次長)、阿部義典(環境審査員補)、市川太一(広島修道大学元学長・教授)、大嶋登(会社員)、太田武(元中国放送職員)、大藤千恵子(お好み焼き店経営)、香川敬三(前JICAブルガリア事務所所長)、川口悦子(主婦)、酒井整子(主婦)、佐々木愛子(会社経営者)、佐々木典明(中国放送顧問)、杉田雅之(中国放送取締役)、大門洋三(レストラン・ポルタポルテ経営者)、田川寿一(広島県議)、田辺正幸(語学教室事務局)、豊嶋節夫(幼稚園勤務)、豊田純爾(通訳)、永田みどり(主婦)、浜部直樹(水産生物生態研究会代表)、林紘太郎(会社社長)、福本尚子(カルチャーサロン主宰)、松島千子(団体職員)、米山榮子(元広島県立大同窓副会長)。家族会員:今村悦子(会社員)、小原弘之(医師)、坂本佐智子(主婦)、豊嶋豊子(主婦)、林暁子(元日本語教師)、藤田美智子(主婦)。法人会員:中国タクシー株式会社、広島修道大学、株式会社ビバ、株式会社ケー・アイ・プロデュース、(財)ひろしま国際センター、(有)パリアンジャパン。特別会員:マリノフ・ヴラディミール(元広島大学ブルガリア人留学生・理学博士) 以上。

番外編＜2006年のイベント紹介＞



琴欧州と交流(2月4日)



第5回・ブルガリア理解講座(2月4日)



第1次・訪問団派遣など検討した第5回・「理事・幹事会」(2月25日)



バラの女王と日本各地の花の女王(5月3日)



エミリアさんと交流した広島市立大学で(5月11日)



JICA研修員の歓迎交流会で(6月19日)



第4回・「ブルガリア料理とワインを楽しむ会」(12月10日)

資料編

I. 広島市議会での当協会・理事の質問要旨

1. 2005(H17)年・第5回広島市議会定例会一般質問(10月4日)【質問者:渡辺好造 議員】

【質問】平和・文化・経済交流について

本年(2005)5月14日、先月25日に閉幕した愛・地球博のイベントに参加するため来日していたブルガリア共和国のアンゲル・マーリン副大統領が広島市を訪れました。自然に恵まれた東欧の国・ブルガリア共和国は、1989年に共産党体制から民主主義体制に移行し、1991年から自由で民主的な新憲法を採択し、2007年1月からEUに加盟し新たな国造りに取り組もうとされていますが、経済はまだ発展途上の段階にあり、日本の支援を望んでいるのが現状でもあります。

特産品はローズオイル、ブルガリアチーズなどが有名であります。毎年、バラの女王を選びバラ祭りを行っております。

同副大統領は、(ひろしま・ブルガリア協会設立準備委員会の案内で)原爆慰霊碑に献花し、広島平和記念資料館を見学しました。見学に先立ち、(秋葉)市長と懇談の機会があり、私も同席させていただきましたが、特に平和交流の促進に、民間レベルでの交流を促進し、互いの地域を重ね合わせながら切々と語られ、核兵器使用は野蛮で許せない行為であると強く訴えておられた姿には感銘をいたしました。

その後、食品機能開発研究会の代表者との経済セミナーに出席され、東広島市の酒類総合研究所の視察などを経て、15日には同国との交流がある福山市のばら祭りに参加されました。

また、7月8日には「ひろしま・ブルガリア協会」の設立に際し、同国駐日大使館からブラゴヴェスト・センドフ駐日大使が(ひろしま・ブルガリア協会の役員と共に)広島市を訪れました。そして、(秋葉)市長と平和・経済交流などについて意見交換がありました。その中で、市長からブルガリアからカザンリク市の市長が、第6回平和市長会議被爆60周年記念総会に参加するため、8月5日に広島を訪れる旨の報告がありました。

(センドフ)駐日大使は、意見交換の中で、これまでのヨーグルトの輸出に加え、ブルガリア・ワインの輸出に力を入れたいとも話され、カリフォルニア・ワインとの比較を通して、その優位性を話されておりました。そこでワイン談義となり、大使から市長にブルガリア・ワインが贈られました。

(秋葉)市長からは、「ブルガリアの発展のために文化交流に加えて経済交流が必要ではないか。広島でできることがあれば応援したい」とエールも送られておりました。

そして、8月5日にはブルガリアからカザンリク市のステファン・ダミアノフ市長が本市を訪れ(ひろしま・ブルガリア協会の歓迎交流会や平和市長会議、8・6平和記念式典などに参加され)ました。

こうした一連の交流の中で、次のような意向がブルガリア及びカザンリク市から(ひろしま・ブルガリア協会を通して)示されているようであります。



マーリン副大統領と秋葉市長
(2005年5月14日)



ブルガリア
のワイン

2005年度バラの女王



【質問1】

ローズ・クイーンをフラワーフェスティバルに呼んでいただけないか、ということ。福山のばら祭りは、例年、フラワーフェスティバルの後に開催されます。その意味で、県内でのブルガリアとの平和・文化・経済の交流期間と位置付けて取り組まれることは、大変有意義であると思います

【質問2】

(ひろしま・ブルガリア協会役員からの提案を受けて)カザンリク市長から

① 「被爆60周年記念の原爆展」を開催したいので、被爆資料を送ってほしい。ちなみに、ソフィア市で過去1回開催したことがあるようであります。

② 来年(2006)か再来年にカザンリク市で「平和市長会議」を開催していただきたい。という意向を持っておられるようです。本市として、このような意向に対して、どのように対応されるのか、お答えください。

また、世界との平和・文化・経済交流は、地道で息の長い取り組みが必要となりますが、本市がこれまで取り組んでこられた国際交流を踏まえて、ブルガリアとの交流を今後どのように進めていかれようとするのか、お答えください。

【答弁:秋葉忠利 市長】

1. ブルガリアとの交流については、議員ご指摘のとおり、本年(2005)5月にアンゲル・マーン副大統領一行が来広された際、核兵器廃絶に向けた取り組みや経済交流などについて幅広く意見交換を行いました。

その中で副大統領は、被爆体験の継承や平和市長会議の活動を中心とした核兵器廃絶への取り組みを基軸とし、都市や市民レベルで多様な国際交流や国際協力を推進していくという本市の取り組みに理解を示し、今後ブルガリアと広島との平和・文化・経済面での交流を盛んにしていくことに賛同をしてくれました。

副大統領一行は、市内企業を含む県内有力食品メーカーなどが参加する「ブルガリア経済セミナー」にも出席され、広島とブルガリアの経済交流を一層推進するためのプレゼンテーションをされたこととっており、これを機に企業レベルでの交流が活発になるものと期待しています。

2. 議員ご指摘のように、その後ブルガリア大使との懇談もあり、その具体的なレベルでの情報交換をいたしました。また、委員からご紹介がありましたように、カザンリク市から原爆展や平和市長会議開催の意向が示されていることについては、核兵器廃絶に取り組む広島市としても心強く感じております。

3. カザンリク市での原爆展の開催については、今後、同市と協議し、「ヒロシマ・ナガキ原爆写真ポスター」の送付など、できる限りの協力をしていきたいと考えています。

平和市長会議の開催地については、総会は広島市、長崎市理事会は役員都市、ということでこれまで開催してきております。

その他の都市では開催していませんが、平和市長会議の取組みに積極的に参画したいとのカザンリク市の意向も踏まえ、今後、同市の協力を得て、ブルガリア国内の加盟都市の増加を図り、さらにブルガリア国内で中心的な役割を果たしていただきたいと考えております。

4. また、(2005年)7月には、「ひろしま・ブルガリア協会」が設立されたところであり、今後、本市としても、市民レベルで文化・経済などの幅広い分野において多様な交流活動が行えるよう支援を行うとともに、平和市長会議の取組みなどを通じ、都市レベルでの連帯を深めてまいります。

【答弁:濱本康男 経済局長】

1. フラワーフェスティバルでは、これまでも、この祭りを盛り上げるため、国内各地から花にまつわるお客様に参加していただきとともに、本市の姉妹・友好都市や海外において花祭りを開催されている都市に対し、市長から参加の案内をしています。

2. 来年(2006)は、フラワーフェスティバルが第30回という節目の年を迎えることもあり、現在、祭りを盛り上げるための企画の一つとして、花にまつわるイベントの充実を検討しております。

こうしたことから、国内外の都市からの参加についても、これまで以上に幅広く働きかけていきたいと考えており、日程やその他の条件が整えば、ブルガリアのロー

ズ・クイーンをはじめ、これまで本市と交流のある米国サクラメントの桜祭りや、近く広島からの定期便が就航するタイからは、チェンマイ花祭りなどの関係者にも参加していただくよう今後、協議してまいりたいと考えております。



ブルガリア経済セミナー(2005年5月14日)



センド大使と会見

(2005年7月8日)



ひろしま・ブルガリア協会の設立総会

(2005年7月8日)



ひろしま・ブルガリア協会の設立記念パーティー(2005年7月8日)

2. 2006(H18)年・第4回広島市議会定例会一般質問(9月28日)【質問者:渡辺好造 議員】

【質問1】

ブルガリア・カザンラック市の(ステファン・ダミヤノフ)市長から、ひろしま・ブルガリア協会に対し、世界遺産・トラキア文化の広島及び全国巡回展などの申し入れがあった。本市で対応、支援、アドバイスできるものがあれば答えて欲しい。

【答弁:竹本輝男 市民局長】

トラキアは、バルカン半島東部の歴史的地名であり、現在のブルガリアを中心とする地域です。ローマ時代以前の古代トラキアは、主として紀元前5世紀から紀元前3世紀にかけての数千にも及ぶ墳丘と墓の建築が特徴的であり、発見された数多くの貴金属製の宝物は、数量、室ともに特筆に価するとされています。

カザンラック市にあるトラキア人の墳墓遺跡は、1979年(昭和54年)、世界遺産一覧表に登録されています。

世界遺産・トラキア文化の出土品である黄金仮面や黄金花輪などの広島及び全国巡回展を開催するにあたっては、埋蔵や経費、運営体制等の課題があり、

カザンラック市長が、ひろしま・ブルガリア協会に対して申し入れた内容をよく確認する必要がありますが、こうした展覧会は、マスメディアや民間の企画会社を中心となって企画し開催する例が多いことから、本市としては事業後援を行うなど可能な範囲で協力したいと考えています。

【質問2】

広島のFFとカザンラック市のばら祭りでの交流についてはどうか。

【答弁:濱本康男 都市活性化局長】

ブルガリアとの交流については、平成7年(1995年)に福山市のばら祭りにブルガリアの大使が出席されたことを契機として始まり、以後、交流が積み重ねられ、今年度は広島のフラワーフェスティバルにもブルガリア・カザンラック市のバラの女王にお越しいただきました。

ご提案のフラワーフェスティバルとカザンラック市のばら祭りととの交流が実現すれば、両市の間の友好は一層深まるものと考えられます。

その一環として、バラの女王とフラワークイーンを相互に派遣することは意義深いものと思いますが、日程や経費等の条件について検討する必要がありますが、今後、フラワーフェスティバル実行委員会やひろしま・ブルガリア協会等関係者と、協議してまいりたいと考えております。

世界遺産・トラキアの黄金遺品



女神の水差し



黄金の



ばらの女王らの招待

(2006年5月3日)

II. 原爆展開催までの経緯

2005年 5月14日(土) ブルガリア共和国のアルゲン・マーリン副大統領一行が来広し、当協会準備委員会の今村 功事務局長が、広島市内の行事(県と福山ブルガリア協会主催のブルガリア経済セミナーの開催など)から東広島市の酒類総合研究所の視察、福山市ばら祭りまでの案内役を務める。その際に、広島平和記念公園や原爆資料館(正式名・平和記念資料館)の見学や原爆慰霊碑への献花、秋葉市長の表敬訪問などを実施する。



秋葉市長との会見では、同副大統領がソ連圏の核兵器搭載ミサイル150発の管理責任者であった時、発射準備の命令が下り、発射ボタンを押す直前まで来た。1発の核弾頭は、広島の2、3倍の威力があった。その待機中、自分や親戚の子ども、ブルガリアの多くの子供の顔が頭の中をよぎった。もし、発射ボタンを押せば世界第3次大戦が勃発し、地球は破滅するのでは・・・と、苦しんだが、中止命令が出てホッとした、と当時の心中を吐露し、「核兵器は絶対悪だ。核兵器を使用させてはならないし、廃絶すべきだ。今後、被爆地・ヒロシマとの連帯をしたい」旨の話があった。核戦争の直前まで行った秘話に対し驚愕するとともに、同副大統領の苦しい心中に共鳴し、涙が浮かんだ。その時に、ブルガリアで「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」を開催する、と決意する。

5月24日(火) 駐日ブルガリア共和国大使館から当協会準備委員会にブルガリアで3月3日の開放記念日に次ぐ第2の国家的記念日・聖キリル&メソディウスの日(文化・教育の日)のパーティに招待状が届き、今村事務局長が参加。センドフ大使と懇談する中で、ブルガリアでの原爆展の開催や来る7月8日の当協会設立総会への出席、大学での講演などの話をする。



7月 8日(金) ひろしま・ブルガリア協会の設立総会への参加のために来広した駐日ブルガリア共和国大使館のブラゴヴェスト・センドフ特命全権大使と当協会役員が広島市役所に秋葉忠利市長を表敬訪問。その際、同市長から、昨年(2004年)5月の国連の会議で会ったブルガリア共和国カザンラック市のステファン・ダミヤノフ市長に被爆60周年の今年8・6前後に行う平和市長会議への参加を呼びかけ、同市長が来広することになった、と報告がある。その時点で、センドフ大使はダミヤノフ市長の来広をまだ知らない様子だった。



同席では、秋葉市長が「友好交流だけでなく経済交流の推進が重要では。広島市は友好交流、経済交流などでもできることは協力したい」とエールを送る。これに対し、センドフ大使は、「これまで日本ではヨーグルトでブルガリアを知ってもらったが、今後はワインの輸入に力を入れたい。広島とも多角的な交流を進めたい」と話した。

7月30日(土) 第1回・理事・幹事会で2006年6月のカザンラックバラ祭りに第1次・「ブルガリア訪問団」を派遣することを決定し、参加者の募集や旅行社の選定などの準備に入る。この時点で参加希望者は、2、3人だった。直ちに、地元旅行社4社に日程と見積をお願いする。

カザンラック市のバラの女王と日本語弁論大会優勝者の招聘を議題にあげ今後、福山ブルガリア協会やひろしまFF実行委員会、広島市などと検討することにした。

2005年8月 5日(金)



平和市長会議被爆60周年記念総会の終了後の夕刻から、同総会参加のために来広したダミャノフ市長と通訳のマリア・ヨトヴァさんを招いて「同市長を囲む歓迎懇談会と交流パーティ」を行い、友好を温めた。この日は、協会から浅野洋二相談役、海生直人会長や佐々木典明代表理事、藤田洋三副代表理事らが参加し、広島とカザンラック市の今後の交流促進などを語り合った。

さらに、120万都市に発展した広島の市街地を展望してもらうためにリーガーロイヤルホテルのラウンジ・トップに案内し、今後の交流について懇談する。

8月 6日(土)



被爆60周年・平和記念式典の終了後に、当協会の浅野洋二・相談役と今村常任理事・事務局長がダミャノフ市長と再会、同市長が軽い日射症状になっていたために市内でしばし休憩を取る。症状の回復後、同市長、ヨトヴァ通訳、浅野相談役、今村専務理事(当時、常任理事・事務局長)の4人が懇談する中で、核兵器廃絶と世界平和の構築について話題となり、当協会側から「カザンラック市で原爆写真展を開催していただきたい」と提案した。

これに対し、ダミャノフ市長は、「グット・アイデアです」と即応諾し、①原爆写真展をできるだけ早くカザンラック市で開催したい②平和市長会議をカザンラック市で開いて欲しい③秋葉市長にも来て欲しい④貴協会からもカザンラック訪問団を派遣して欲しい——との具体的な答えがあった。そして、「私はもう広島を発たなければいけないので、原爆展が開かれるように、貴協会が広島市や広島平和記念資料館などの関係者との橋渡し役をしていただきたい」と言い残して帰国した。

その際に、今後の連絡を訪ねると、通訳のヨトヴァさんが「私が窓口になる」とメールアドレスを教えてくれる。

8月中旬～



数日後、広島平和記念資料館を訪ねて、原爆写真展用の資材を貸してくれるのかを相談した。同資料館の啓発担当職員から、同写真展用のポスターなどを貸し出す事業があり、継続して同写真展を開くのであれば贈呈する、と説明を受ける。しかし、「本当に原爆写真展を開けるのか？」というよな感じを抱いているように見受けられた。

同時に、カザンラック市に帰った通訳のマリア・ヨトヴァさんに、原爆展の準備を進めているが、カザンラック市側の受入準備を聞いて欲しい旨、メールで連絡する。

9月上旬～

今後のブルガリアやカザンラック市と広島との友好交流や原爆写真展の開催などに対して広島市や同資料館から積極的に協力してもらうにはどうすれば良いのか、と当協会の理事の一人である渡辺好造広島市議に相談する。これまで、当協会の事業を側面から応援し事情を良く知っていた同市議は、市議会本会議で取り上げて広島市側の姿勢を公式に表明してもらいましょう、と議会で取り上げてくれることを約束してくれる。

9月19日(月)

広島平和記念資料館から、広島から送るのは船便なので早くとも2か月を要するし、途中で破損したり紛失する恐れがあるので、数年前に在ブルガリア日本国大使館の荻野様(現、外務省勤務)が仲介してソフィアでの原爆展に資料を贈呈したものがあるので、カザンラック市での原爆展に貸出ししてもらおうと確実ですが、とアドバイスを受ける。そこで荻野事務官に連絡する。

9月28日(水)

荻野事務官から、数年前に原爆展の資料の贈呈を受けた首都・ソフィアの地球と人間博物館のマレエフ館長から、①貸し出しができるので、カザンラック市長から正式な貸出し依頼書の提出を②8月6日には当館で使用するので貸出しできない旨、連絡があったとメールが入る。

カザンラックの市長にか貸出し依頼書の提出をお願いするのも、8月6日に借り出せないのでは意味が半減するので、同博物館からの借り出しは断念し、他の搬送方法を検討する。

10月 4日(火)

広島市議会の本会議で渡辺理事が取り上げ秋葉市長らから、原爆写真展などの開催を含めて全面的に協力する(但し、平和市長会議の総会は広島市、長崎市、理事会は役員都市で開催することになっているのでできないとの答えを引き出してくれる(本会議の質疑応答は前掲参照)。

11月 23日



カザンラック市のばらの女王らの招へいで福山市で第1回「ひろしま&福山ブルガリア協会」企画会議を行う。

当協会からは今村常任理事・事務局長と樋口英子会計理事・事務局次長が、福山ブルガリア協会からは浅野洋二幹事長、伊達道保事務局長が参加。当協会からは、①バラの女王などの招へいはまだ決まっていない②12月4日の第3回・理事・幹事会で諮ると伝える。

11月25日(金)

何度もメールをしたがカザンラックのマリア・ヨトヴァさんからは返事がないので、外務省欧州局中・東欧課ブルガリア・マケドニア担当の荻野毅事務官に連絡し今後、原爆写真展についてカザンラック市側と相談するのに困った時の連絡先として在ブルガリア日本国大使館の山岸書記官を紹介してもらう。

11月27日(日)

外務省欧の荻野毅事務官から紹介された在ブルガリア日本国大使館の山岸あおい三書記官

2005年11月30日

に、「ヨトヴァさんから返事がないのでダミャノフ市長に連絡を取って欲しい」とメールをする。

在ブルガリア日本国大使館の文化広報担当・山岸あおい書記官から初メールが届く。

仕方なく、それ以来はブルガリアのことについては再三、同書記官にメールをして、迷惑を掛けた。山岸書記官は、こんなにしていただいても良いのかという程にその都度、懇切丁寧な対応とアドバイスをしてくれた。そのお陰で、バラの女王と日本語弁論大会優勝者の招待、ブルガリア訪問団の件などを並行して進めることができたのである。

山岸書記官とは、これまでの1年足らずの間に約200回のメールのやり取りをしている。同書記官が丁寧な橋渡しをしてくれたお陰で、当協会の活動を多角的に進めることができた、と感謝するばかりである。

- 12月 1日(木) 山岸書記官が色々と労をとってくれて、「カザンラック市役所の窓口が『国際プロジェクト投資局』の局長・Mr. Ivan Markovになった。今後は、直接、英語でメールのやり取りをして欲しい」と連絡がある。そのため、最初の連絡和文メール文を書いて英語通訳者で当協会の会長夫人である海生郁子様を送り、英文に翻訳してもらってMr. Markov にメールで送る。
- 12月 2日(金) マリア・ヨトヴァさんと連絡を取ったところ、日本を訪問した時の彼女の役割はあくまでもその時限りのカザンラック市長の通訳だった。彼女の本業はJICAプロジェクトのコーディネーターであり、カザンラック市の職員でもなく通訳でもないの、彼女を巻き込んでやり取りをされることは困る、との趣旨のメールが入る。
- 12月 4日(日) 第3回・理事・幹事会で、カザンラック市のばらの女王と日本語弁論大会優勝者を当協会で開催することを決定し、山岸書記官に連絡する。
- 12月15日(木) やっとMr. Markovから具体的な返事がメールで来たので、これで順調に進むと、ひと安心する。その後、原爆写真展の具体的な資材や輸送方法などに関するメールは、広島平和記念資料館・啓発担当の沖田なつき様に英訳してもらい直接、Mr. Markovと連絡を取り合ってもらおう。沖田様には、その都度、英文と和文を協会事務局にメールで送ってもらいながら進める。本当に親切な沖田様には頭が下がる思いがした。
- 12月17日(土) 福山市で第1回・「ひろしま&福山ブルガリア協会」三役会を開き、カザンラック市のばらの女王らの招へいについて意見を交換し、国内の日程(費用は受け入れ協会が負担)や移動費(協会間の移動費は折半)などを具体的に検討して決める。参加者は、当協会から海生会長、今村常任理事・事務局長、坂本光裕理事(代表理事代理)、福山ブルガリア協会から中村会長、浅野幹事長、伊達事務局長。
- 12月20日(火) 資料館の沖田様からMr. Markovへ、当協会側の原爆展の開催希望期間、展示品目などをメール送信してもらおう。
原爆写真展用のポスター2ケース(重さ各約3.5kg)の確実で安全な輸送方法として外務省ルートが有ればいいのに、と沖田様から聞き、早速、外務省ブルガリア・マケドニア担当の荻野毅事務官に昼過ぎに連絡し相談する。同氏から現在は、外務省経由はないと思うが省内を調べてみるとの返事をもろう。
夕方、荻野事務官から、「外務省ルートで原爆資料を送る手立が見つかった。当省広報文化交流部総合計画課が外国での原爆展開催への協力を進めており外務省ルートで送る場合は在ブルガリア日本国大使館が『後援』という形になる。後援手続きを在ブルガリア日本国大使館に連絡しても良いか」と連絡が入る。当協会側は、後援してもらおうのは願ってもないこと、と願う。
- 12月29日(木) JICAブルガリア事務所の香川敬三所長(2006年11月～異動で帰国)が広島市に一時、里帰りした際に連絡があり、ブルガリアの状況を詳しく聞いた。そして協会メンバーにもなってもらい、100人力を得たような思いがした。以来、山岸書記官とともにブルガリアとの橋渡し役をしていただき、大いに助かった。
- 2006年 1月11日(水) その後、カザンラック市の担当者から具体的な返事が返ってこないの心配していたが、やっとMr. Markovから具体的な返事が来る。昨年、ブルガリアと日本の時間的感覚は違うので、のんびり構えていてください、と言われたことを確認した思いがした。
- 1月15日(日) 外務省から在ブルガリア日本国大使館から「後援」承諾の連絡が無いようなので、第1次・訪問団が手で持って行ってもよい旨と、カザンラック市のばら祭りの日程をカザンラック市の担当者に聞いてもらうように沖田様に願う。

2006年2月 4日(土)



2月中旬

福山ブルガリア協会の中村会長の叙勲祝賀会と琴欧洲を励ます会に、当協会から藤田洋三副代表理事、今村常任理事・事務局長、渡辺好造理事、梶田祐子さん、藤田夫人らが友情参加。終了後に、日本ブルガリア協会の佐々木文徳事務局長と懇談し、バラの女王らの招へい日程などを詰める。佐々木事務局長との出会いが、その後の第1次・「ブルガリア訪問団」の際に多いに助かることになるとは思わなかった。

第1次・ブルガリア訪問団の件で広島市内旅行社4社と現地(ブルガリア)旅行社3社に見積もりを出してもらい、最初に一番安かった広島市内の旅行社にお願いして準備を進めていた。ところが、訪問の日程が詰まるのに従い旅費が当初の約1.8倍になり困まり果てていた。

その矢先、日本ブルガリア協会事務局長でTCIJapanの佐々木文徳氏から、先般、東京から出すツアーの調査でブルガリアに行ってきたが、カザンラック市長が「広島からの訪問団の具体的な日程が届かないのでどうしたものか」と心配されていたと連絡がある。事情を説明すると、東京発のツアー(料金は当初、広島の旅行社の見積もり程度)の席を空ける、と誘われてお願いすることにした。

その後、訪問した際に原爆展の事前打合せをするためにカザンラック市との連絡役も引

2月28日(火)

TCIJapanの佐々木様との間で何度も連絡を取り合い、やっと最終的な日程が決まる。結局、訪問団メンバーは10人(女性8人、男性2人)で、寺田理事(医師)に団長役をお願いする。



外務省の荻野氏から、「正式に在ブルガリア日本国大使館の『後援』が決まった」と連絡があり、展示資料は外務省ルートで送ることにした。安全で確実に現地に届けられると共に、在ブルガリア日本国大使館の「後援」が付けば原爆展を国(外務省)が公に応援してくれることになるので万々歳。

3月25日(土)

第6回・理事・幹事会で第1次・訪問団のメンバー10人が最終決定。さらに、同訪問団事業が市国際交流協力事業補助金の認定になり広島市平和文化センターの協賛事業となったことを報告。

4月 8日(木)

当協会の2006年度総会で、カザンラック市のバラの女王ら招へい(5月)、第1次・訪問団(6月)、第2次・訪問団(8月)の派遣事業などを新年度事業として正式に決定。それぞればらの女王招へい担当者や訪問団員が決意を披瀝し、各事業の実施に向けて実質的にスタートし、万全な体制と準備を進めていくことになった。

5月 1日(月)

カザンラック市のばらの女王と日本語弁論大会優勝者が来広、13日まで当協会ですべて案内する。中でも2日には、原爆資料館の見学や慰霊の献花、広島市長の表敬訪問などを行い核兵器の脅威と悲惨さを認識してもらうことにしている。

5月30日(火)

第1次・「ブルガリア訪問団」が広島空港を出発。

6月 1日(木)

在ブルガリア日本国大使館を表敬訪問し、福井宏一郎特命全権大使や山岸書記官と懇談。何かとお世話になった山岸書記官とは初めて会うが、協会ニュースへの投稿で顔写真を見ていたので、発対面とは思えなかった。



これまでのお礼を述べるとともに、今後のご支援、ご協力をお願いする。訪問団員も親しく話し合い、友好を深めた。

福井大使には、原爆ドームを刺繍した広島市長からのタペストリーと、訪問団員からの宮島彫りの飾り盆を贈呈した。原爆展資料の到着を確認すると、すでに外務省ルートで届いたのでカザンラック市に送った、といわれた。教育などについて説明を受けた後、福井大使を囲んだものと山岸書記官を囲んで記念写真を撮った。

6月 3日(土)

カザンラック市役所にダミヤノフ市長を表敬訪問し、8月の原爆展、さらに8月以外の月の巡回原爆展、毎年8月の原爆展などの開催を確認する。その際、同市長から8月の原爆展には広島からも必ず来て下さい、と要請を受け、必ず第2次・訪問団を派遣する、と確約する。



この席には、福井大使、JICAブルガリア事務所のJ香川敬三所長、浅野相談役なども掛け付けて、有意義な意見交換をすることができた。

この日の前後には、ブルガリアの独立記念碑ともいえるシプカ峠の自由の碑や世界遺産・トラキア人の墓、ばら祭りなどを見学し、戦争のおろかさや平和の大切さをしみじみと感じた。

6月19日(月)

JICA中国国際センターから連絡があり、JICA研修で来広中のブルガリア政府関係の若手中堅研修員との交歓会を行い、8月にカザンラック市で「原爆展」を開催することを伝え、機会があれば来館して欲しい旨、話す。JICA研修員は、中小企業振興庁のエレナ・ペネヴァ上級専門員家(女性、32歳)と経済エネルギー省のストイネ・キタノフ上級専門家(男性、34歳)。

6月27日(火) 第2次・「(原爆展開催)訪問団」の参加者が数名という状況から、改めて第2次・「訪問団」の際に問い合わせた国内外の旅行社数社と新しく紹介された旅行社数社と折衝を始める。

しかし、参加者が数名とあって広島旅行社は受けてくれないか、高額な料金を要求された。そこで、第1次・訪問団の時に料金の合意が得られず断ったが、2006年2月8日からメールの交換を始めていたブルガリア・ソフィアにあるSEMA express社との交渉を再開

2006年6月29日(木) 国の平和には経済発展が不可欠なので、JICA研修員と広島県国際ビジネス促進室の新林室長らと1時間余り、ブルガリアの現状と産業、今後の見通しなどについて具体的に意見を交換する場を持った。

一方、SEMA express社からブルガリア滞在・移動・宿泊・通訳など含めた見積もりが来たので、直ちに参加者予定者に情報を転送して検討してもらおう。その後、参加予定者のそれぞれの都合を同社に連絡し調整してもらい、最終的に同社と契約して訪問することにした。

その後、カザンラック市との連絡やヴェリコ・タルノヴォ大学などの連絡など全てに渡り

7月25日(木) カザンラックへの出発報告のために、訪問団の3人と渡辺理事(広島市議)が、広島市役所に秋葉市長を訪ねたが不在のために、山田助役らが対応し、同市長からのダミヤノフ市長宛の親書を預かる。

7月29日(土) 広島空港(7:05発)を出発し、成田(11:35発)経由で一路ドイツ・フランクフルト(16:53着、19:55発)経由ブルガリア・ソフィア・ヴラジデヴナ空港(23:30着)へ。



ソフィア空港には、JICAブルガリア事務所の香川所長とSEMA express社のマルコフ社長、神戸氏、通訳のヴェリコ・タルノヴォ大学日本語学科3年シルビアさん、同科1年ナディアさんらが出迎えに来てくれていた。深夜に関わらず第1次訪問団の時も出迎えに来てくれたJICAブルガリア事務所の香川所長の顔も見え、本当に心強く思い、その誠意に心から感謝した。29日は、ソフィアのホテルに泊まって翌日から、カザンラック市へ向かう。

7月30日(日) 朝8:00過ぎ、これまで何かとお世話になった在ブルガリア日本国大使館の山岸書記官が、わざわざホテルに立ち寄ってくれて、カザンラック市での原爆展のことなどについて最終打合せをしてくれた。山岸書記官にはお世話になりっ放しで感謝するばかり。

打合せ後に、8月1日にカザンラック市で再会することを約束して出発した。

カザンラック市街地に入る前に、世界の80%を生産するというローズオイルの有名な蒸留所や世界遺産・トラキア人の墓を見学した。第1次・訪問団の時にはトラキア人の墓のレプリアの見学だったが、今回は特別に副市長と同市博物館のコシヨ・ザレフ館長の案内で、本物の世界遺産・トラキア人の墓の中を見せていただいた。

7月31日(月) 10:00に、原爆展の会場・カザンラック・アートギャラリーに行く予定だったが、急きよ、ダミヤノフ市長から会いたいと連絡があり、カザンラック市役所にダミヤノフ市長を訪ねる。訪問団メンバーの大半は、昨年(2005)8月5日に、広島を訪れた同市長と歓迎会で会っていたので、市役所ではダミヤノフと再会したことを懐かしみながら、しばし懇談した。



同市長は、ひろしま・ブルガリア協会の人、「カザンラックで会いましょう」と約束したことを守ってくれた、と喜ぶとともに、今後の更なる交流の促進を願っていた。

そして、原爆展の具体的打合せは、会場に待たせている担当者と話してください、と言われる。

市役所を出て会場に向かい、フリスト・ゲネヴァ館長らと最後の打合せをし、必要な備品を準備していただいた。

8月1日(火) 午前中は、500年間のオスマントルコから独立するために多くの犠牲者を出したシプカ峠の「自由の碑」に足を伸ばし、犠牲者の冥福を祈った。



17:00から、アートギャラリーで行われた「原爆展のオープニング」に参加。秋葉市長から預かった新書(今村団長が代読)や当協会の海生会長メッセージ(郁子会長夫人が代読)を紹介し、被爆者・佐々木理事が被爆体験を語りながら挨拶した。

2005年5月にマーリン副大統領に会い原爆展開催を決意し、1年4か月振りにやっと原爆展の開催ができ感慨深いものがあった。

8月2日(水) 原爆展2日目にブルガリアで初めての「被爆者の証言」を佐々木理事が行った。同理事の被爆体験を紹介しながら核兵器の廃絶と恒久平和の構築のために連帯を、との訴えに、会場からは賛同の意が表された。



証言の後に、参加者全員で世界の平和を願いながら千羽鶴を丁寧に折り、各自が持ち帰っていった。

*原爆展は、その後、8月31日まで引き続いて開催され、延べ800人の来館者があった。

Ⅲ. 新聞報道

＜新聞掲載の経緯＞

広島平和記念資料館から当協会に、第1次・「ブルガリア訪問団」が5月末に訪れる際にカザンラック市に贈る「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真展」の目録などを事務局から渡すので、5月26日（金）に来館してほしい、との連絡が入った。

約束の日の前日25日（木）、同資料館から「明日は前田館長から目録をお渡しすることになった」と連絡が入る。当日の朝、数社の新聞社から、「今日の目録渡しを取材していいですか」と電話があったので「良いですよ」と答える。

記者が取材に来るといふことで直ちに、3役のうち急でも来られそうな佐々木代表理事や訪問団メンバーに連絡したが連絡がつかない。連絡がついた方でも「予定が入っている」と断られた。

やむなく今村常任理事・事務局長が一人で同資料館を訪ね、会長などが来館できなかったことを謝し、前田館長から目録とDVDを預かり、「カザンラックでの原爆写真展の成功を」と激励を受けたのである。

その際の記事が、中国新聞と読売新聞に大きく掲載され、同原爆展の意義をさらに深く感じるとともに、当協会の活動を紹介してくれた両新聞の担当記者に感謝している。

1. 中国新聞・報道

2006年（平成18年）5月27日（土曜日） 中国新聞



原爆展の展示品リストとDVDを前田館長から受け取る今村常任理事

ブルガリアで原爆展

カザンラック市 8月、被爆者証言も 広島市民団体

東欧ブルガリア中部の、八月一日から三十一日、展示するパネルのリストと被爆者の証言を集めたDVDを原爆資料館（中区）の前田耕一郎館長から受け取った。

原爆展は市立アートギャラリーを会場に、放射線や熱線による原爆被害のすさまじさや「原爆の子の像」のモデルになった佐々木禎子さんについて紹介する写真パネル五十六枚を展示する。ロシア語か、英語の説明文が

カザンラック市は平和市長会議（会長・秋葉忠利、広島市長）に加盟。ステファン・タミヤノフ市長が昨年八月、広島市であった会議に出席した際、同協会から原爆展の提案を受けていた。

この日は、同協会の今村功常任理事が資料館を訪れ、前田館長から「あの日、広島で何が起きたのかを世界に知らせるため協力してほしい」と激励を受けた。今村理事は「核兵器廃絶と平和を願うヒロシマの心を訴えた」と力強く答えていた。カザンラック市以外の都市での巡回展も提案するという。（梁暁雨）



カザンラック
ソフィア
ブルガリア
ギリシャ
トルコ

006年5月31日(水)付け

前田館長(右)から原爆写真ポスターの目録を受け取る今村事務局長



8月ブルガリアで原爆展

平和資料館ポスターなど寄贈

ブルガリア・カザンラック市で8月に原爆展が開催されることになり、広島平和記念資料館(広島市中区)は、広島と長崎の原爆写真ポスターや、被爆体験の証言DVDを同市に寄贈した。

カザンラック市と、市民団体「ひろしま・ブルガリア協会」(海生直人会長)が主催。昨年8月の平和記念式典に参列したステファン・タミアノフ・同市長が開権を同協会と相談。広島市も被爆の実相を海外に

も知ってもらおうと、ポスターなどの寄贈を快諾した。

前田耕一郎館長から目録などを受け取った、同協会の今村功事務局長は「ブルガリアの人たちも核の悲惨さに衝撃を受け、平和の大切さが伝わるのでは」と話した。今村事務局長らメンバー10人は31日に渡欧、同市長に贈呈する。

原爆展は8月1〜31日、現地のギャラリーで開催され、広島市の被爆者が体験を証言する予定。他都市での巡回展も企画されている。

IV. 原爆写真ポスターの全内容

1. 「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真ポスター」

展示貸出資料

「ヒロシマ・ナガサキ 原爆写真ポスター」の利用案内

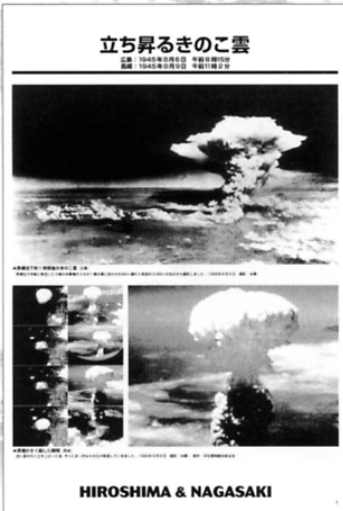
HIROSHIMA NAGASAKI Atomic Bomb Photo Poster

原爆被害の実相を広く世界に伝え、平和への意識を高めるため、広島市と長崎市は共同で原爆被災と現在の核兵器の状況を紹介するポスター及びパネルを作成し、原爆展や平和学習を行う国内外の学校や各種平和団体、自治体などの非営利の団体に貸出しを行っています。

(※国外団体が継続的な使用をされる場合は、寄贈もおこなっています。また、国内へはパネルの貸出しも行っています。)

- ・使用料は無料です。
- ・送料は往路のみ当方が負担します。復路は使用者の負担となります。

① 立ち昇るきのこ雲 Billowing Mushroom Cloud



大きさ：90cm×60cm

重さ：約3.5kg

搬送時：長さ100cm×直径13cmの丸筒入

言語：日本語、英語、フランス語、スペイン語、中国語、ロシア語、ドイツ語、韓国語、イタリア語

In order to pass the reality of the atomic bombings on to as many people as possible and to heighten the awareness of peace, cities of Hiroshima and Nagasaki loan exhibit posters to schools, NGOs, municipalities, etc., for educational/non-profit purposes.

(※Donation is available on condition that the overseas groups wish to continuously use the materials for the purposes of peace promotion.)

- ・ Rental charge is free.
- ・ We cover the outward shipping fee only. The materials should be returned at the applicants' responsibility.

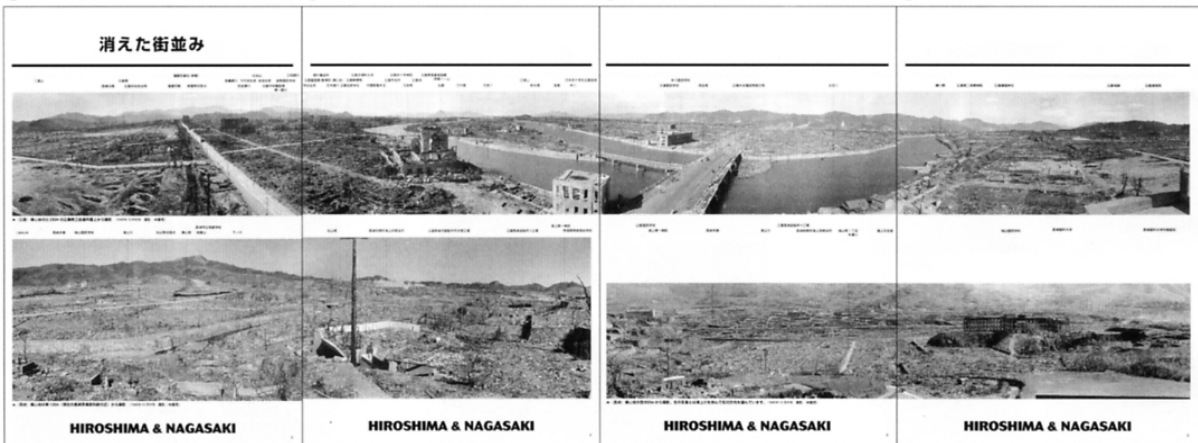
Size : 90cm×60cm

Weight : approximately 3.5kg

Carriage case (cylindrical container) : 100cm (length)×13cm (diameter)

Languages : Japanese, English, French, Spanish, Chinese, Russian, German, Korean, Italian

② 消えた街並み The Vanished Cities



6 原爆被害
A-bomb Damage

原爆被害

原爆は、戦時中日本に投下された原子爆弾によるもので、広島と長崎に投下された。この爆撃は、人類史上初めての核戦争によるもので、数千人の犠牲者を出した。また、多くの建物が壊滅し、都市が壊滅した。この爆撃は、人類に核戦争の危険性を示した。また、核戦争の危険性を示した。また、核戦争の危険性を示した。

項目	広島	長崎
投下日時	1945年8月9日	1945年8月9日
投下機	B-29超重爆撃機	B-29超重爆撃機
投下高	約3100m	約1000m
投下重量	約3200kg	約2000kg
被害者数	約14万人	約8万人
建物被害	約13万棟	約6万棟
焼死人数	約10万人	約5万人
重傷者数	約2万人	約1万人
軽傷者数	約2万人	約1万人
避難者数	約10万人	約5万人
被爆者数	約20万人	約10万人

HIROSHIMA & NAGASAKI

7 原子爆弾
The Atomic Bomb

原子爆弾

原子爆弾は、核分裂反応を利用した爆弾で、広島と長崎に投下された。この爆弾は、人類史上初めての核戦争によるもので、数千人の犠牲者を出した。また、多くの建物が壊滅し、都市が壊滅した。この爆弾は、人類に核戦争の危険性を示した。また、核戦争の危険性を示した。また、核戦争の危険性を示した。

HIROSHIMA & NAGASAKI

8 原爆投下以前
Before the A-bomb

原爆投下以前

原爆投下以前の広島と長崎の様子を示す写真。当時の都市の様子や、市民の生活の様子が写っている。また、原爆投下後の様子も写っている。この写真は、原爆投下の前後の様子を比較できるように撮影された。

HIROSHIMA & NAGASAKI

9 被爆直後
Immediately After the Bombings

被爆直後

被爆直後の様子を示す写真。焼け焦げた建物や、倒壊した家屋、そして苦しむ市民の様子が写っている。この写真は、原爆投下後の惨状を伝えるために撮影された。

HIROSHIMA & NAGASAKI

10

HIROSHIMA & NAGASAKI

11

HIROSHIMA & NAGASAKI

12 市民が描いた被爆直後のようす
Conditions Immediately after the Bombing as Drawn by Survivors

市民が描いた被爆直後のようす

市民が描いた被爆直後の様子。この絵は、市民が自身の体験に基づいて描いたもので、原爆投下後の惨状を伝えるために描かれた。この絵は、市民の感情や苦しみを伝えるのに役立った。

HIROSHIMA & NAGASAKI

13 熱線
Heat Rays

熱線

熱線の様子を示す写真。熱線は、原爆投下時に発生した放射線であり、市民の健康に大きな被害を与えた。この写真は、熱線の威力を伝えるために撮影された。

HIROSHIMA & NAGASAKI

14 爆風
Blast

爆風

爆風の様子を示す写真。爆風は、原爆投下時に発生した強力な風であり、市民の健康に大きな被害を与えた。この写真は、爆風の威力を伝えるために撮影された。

HIROSHIMA & NAGASAKI